

招待席

乾 直恵

いぬい なおえ 詩人。1901(明治34)年〜1958(昭和33)年。高知県生まれ。東洋大学国文科卒。百田宗治の『椎の木』同人として詩壇に登場。室生犀星や伊藤整、三好達治と知り合い、『詩と詩論』、『文芸レビュー』などに詩や俳句、評論などを発表。主な詩集は、『肋骨と蝶』『花卉』『海岸線』などで、独自の抒情詩を展開した。掲載作は、『日本現代詩大系 第9巻』(河出書房刊)によった。

『^か花卉^き』抄

《目次》

神の白鳥

睡れる幸福

極光

神の白鳥

神さまが、膝でスワンを慈しむ。
御手にふれたこの抜け羽毛げ！

ぼくは冷たい歌を思ひ出す、
時ねぐらをさがす小鳥のやうに。

ぼくはあなたの毛皮のなかへ走りこむ、
ストーヴに、凍えた両手を翳すために。

ぼくはあなたのスエーター・ポケットに潜りこむ、
団欒の、明るいピアノを聴くために。

睡れる幸福

黎明、あなたはきつと、機織音でぼくの夢を揺ぶる。

あなたの震はす指先に、露に濡れそぼつたスワン・リヴァ・デイジイが咲いてゐる。

箴の中で、

幻の星条が消えたり燈つたりする。

ぼくは渺かに、織りかけの薄絹を見る。

淡彩のシヨールが極の方へ靡いてゐる。

あなたは何時の日か、黙つてぼくに指ざした。

——幸福はあすこに睡つてゐる。と……

極光

あなたは三角洲の葦間から、

流暢な各国語でぼくに喋りかける。

ぼくはいちいちそれを懸命に、

速記する、翻訳する。

——アノ橋ノ袂ニ、アノ橋ノアチラガハノ袂ニハ……
——誰カガムカフ岸ニ、誰モムカウ岸ニハ……

長い鉄橋が半分夕陽の中へ折れ込んでゐる。

渡りかければ、ぼくも光のなかへ隕ち込むだらう。幸福を抱へて、不幸を擁いて——

Inui Naoe

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Jan 18, 2010